

海外レポート

イリノイ・レポート
—OCU-UIUC Exchange Symposium と
シカゴ巡見をとおして—

前田 充洋・道上 祥武

はじめに

2016年3月14日から20日に「インターナショナルスクール」プログラムの一環として、アメリカ合衆国はイリノイ州に赴いた。目的は①イリノイ州立大学アーバナ・シャンペーン校 University of Illinois Urbana-Champaign (以下 UIUC) で開催された大阪市立大学との交換シンポジウム OCU-UIUC exchange Symposium にて報告し、海外の研究者と積極的に意見交換を行うこと、②州最大の都市シカゴの巡見である。以下では事前の教育プログラム、シンポジウムとシカゴ巡見について詳細に述べ、その上で海外での／に向けた研究発信について考えたい。

1. 渡航前夜

著者の一人は日本考古学が専門であり、海外での報告はおろか英語での報告自体今回が初めてであったため、入念な準備が必要となった。大阪市大日本史学専修では研究成果の海外発信が積極的に行われてはいるが、その経験がない院生やODはいまだ多い。さらに考古学は文献史学研究者に研究内容を説明するにあたり苦心することが多いと感じている。つまり、今回の報告には異なる言語と分野という「二重の壁」が存在した。その点で渡航前にILCによるトレーニングを二度受けることができたのは心強かった。

2. UIUC でのシンポジウム

① UIUC 巡見

アメリカ合衆国の中部に位置し、ミシガン湖に接するイリノイ州へは日本からおよそ16時間かかる。シカゴ・オヘア国際空港を経てイリノイ州アーバナ・シャンペーン国際空港に到着。空港には当地のコーディネーターである、東アジアおよび太平洋研究センター Center for East Asian and Pacific Studies 所属のエリザベス・オ

イラー准教授 Elizabeth Oyler が迎えに来てくださっていた。オイラー氏によると国際空港としては幾分小規模なこの空港は、もともと UIUC の農学部が農薬散布実習を行うために付設されたものだという。空港から車で



写真1. 大学の正面にあるアルマ・マータ像。アーバナ市とシャンペーン市の境界にあたる。2016年著者撮影。



写真2. ユニオン。大学事務やカフェもあり、学生が行き交う。2016年著者撮影。



写真3. 大学図書館。このフロアには辞典、辞書が多く並ぶ。2016年著者撮影。

20分程かかるホテルも UIUC の学術交流用に建てられており、何もかもが大学を基軸に設計されている。到着早々、日本の大学とスケールが違うことに驚いた。

到着翌日は UIUC の施設を案内していただいた。UIUC はいわゆる「都市型」の大学で、アーバナ市とシャンペーン市に跨ってキャンパスや研究棟が点在している。

午前中には現在大学院に留学している伊藤孝治氏がキャンパス内を案内してくださった。大学の中心地であるユニオン Illini Union と称される場所にはじまり、学部生用図書館 Undergraduate Library や歴史学専修付属の図書館、歴史学専修の棟を見て回ることができた。学部生用図書館ではアメリカ史やアメリカ学に関する重要な文献、最新文献が多くを占める一方、ヨーロッパや日本に関する文献はここ数年更新されていない印象を受けた。

午後からは大学院生であるジョナサン・サマス Jonathan Thumas 氏の計らいにより、ブライアン・ルッパート Brian Ruppert 教授によるゼミナール Introducton to Buddhism に参加できた。内容は日本仏教研究に関する文献をまとめ議論するものであった¹⁾。学生の報告と発言が主体で、教授は基本的に議論のまとめに終始する。このスタンスは大阪市大やヨーロッパの大学と共通する²⁾。学生達は自由に発言し学習意欲の高さを感じられた。その後スパーロック博物館 The Spurlock Museum に向かった。展示物はアメリカ先住民、古代、中世ヨーロッパやアジアなど多岐にわたる。夜にはアメリカにおける日本史研究の第一人者であるロナルド・トビ Ronald Toby 氏と会食し、日本研究及び日本史学に関して意見交換を行うことができた。

② OCU-UIUC Exchange Symposium

3月16日、シンポジウム当日である。2015年度プログラムでは大きくいえば「日本史」が中心となつた³⁾。



写真4. 著者報告の様子。2016年草生准教授撮影。

パネル1の報告は近代史特に19世紀後半以降に焦点をあてたものであった。前田報告は近代ヨーロッパ史の

立場から日本海軍の動きを考察する。ヨーロッパ企業の中から鉄鋼製品の購入先を決定するために海軍が行った製品選定試験の分析を通じて、ヨーロッパ企業と日本海軍の関わりを提示した。伊藤報告はアメリカ史の立場から、日本人ハワイ移住者の動きを考察する。ハワイにおける日本人定住者と現地政府の間で執り行われた様々な交渉を分析することで両者の関係を明らかにした。両報告に対しフロアからは、「他国史」の枠組みで日本（人）の動きを考える際に重要となる、行為主体性をめぐる質問がなされた。グローバル・ヒストリーや国際関係史の観点から個別の事例を論じる際に分析対象を双方向的、多面的に見ることの重要性を改めて認識させられた。

パネル2は、古代・中世における日本に焦点を当てた報告で構成された。道上報告は日本考古学の紹介に端を発し、6~8世紀における住居の分布やそのあり方から大和王権を考えるものであり、トビ氏から精力的にコメントを頂いた。サマス報告は保元物語における美福門院にかかる叙述に焦点をあて、彼女の歴史的評価を改めようとするものであった。いずれの報告も関心を深く引くもので、盛況なシンポジウムとなった。

3. シカゴ巡見

シンポジウムの翌日シカゴに移動した。シカゴ巡見の主な目的は、建築や都市景観の見学を通して、シカゴという都市の成り立ちや変容を考えることで、案内役は草生久嗣准教授である。幸いシカゴの天候は非常に快適で、真冬の装いで歩けば少し汗ばむほどであった。草生氏によれば3月半ばのシカゴは吹雪くこともあり、「この時期に暖かいシカゴはここ十年経験したことがない」という。

グラント・パーク Grant Park から巡見を開始した。



写真5. シカゴのスカイライン。「麓」に位置するのがグラント・パークである。2016年著者撮影。



写真6. 官庁街。1920年代を象徴するこの街並みは、映画撮影にも多く用いられる。2016年著者撮影。

1871年に起きたシカゴ大火の後、瓦礫をもちいて大規模な埋め立てが行われた。その後グラント・パークは現在の区画になった。さらにシカゴの街もその火災を機に改めて区画が整理され、現在のシカゴの街区になったという。この日の夕食は草生氏の勧めでシカゴピザを食べた。厚さ3cmを超えるピザを食べるのも日本ではできない体験である。

18日は官庁街に向かった。ここでは第一次世界大戦前後から1920年代に進行する区画整備のあり様や、第二次世界大戦後から現在にかけてみられる高層ビルの建築様式の変化、都市景観の変化について当時の建築物を前にして学ぶことができた。

その後シカゴ美術院 Art Institute of Chicago を訪問した。世界でも有数の私立美術大学であり、ヨーロッパの遺物から現代美術、写真にいたるまでその所蔵品は多岐にわたる。当日はゴッホ展が開催され、多くの入場者で賑わっていた。

最後にシカゴ大学 The University of Chicago に向かい大学施設を巡見した。「石油王」の名で知られる J. D. ロックフェラー J. D. Rockefeller によって1890年に創設されたこの大学は、オリエント協会 Oriental Institute の博物館にみられるように考古学の分野で世界的な成果を上げている。

草生氏によれば、キャンパス内の建物はオックスフォードやケンブリッジ大学をモチーフに造られているという。その背景には、アメリカ合衆国の中でも「遅く」設立されたため旧来からの「学問の象徴」を様式として採用することで「学問の場」を大々的に演出する目的があったという。設立経緯や景観、アカデミズムがUIUCとは



写真7. Oriental Institute正面玄関。2016年著者撮影。



写真8. シカゴ大学のキャンパス風景。2016年著者撮影。

異なる大学を巡見でき、外国の大学を相対化してみるという貴重な機会を得た。

おわりに

最後に今回のイリノイ渡航を通して、海外での研究発信について考えてみたい。近年、専門を問わず積極的に海外で研究を発信すべきとするきらいがある。報告準備を行うにあたり外国語で自身の研究を「考え」「書か」なくてはならない。今回「日本語での報告も可」という条件であったが、「海外において日本語で報告する」選択肢は著者の中にはなかった。というのも今回の準備に関して特に「日本のこと」をどのように外国語で表すかを徹底的に考えることが非常に有意義だったからである⁴⁾。外国語での報告が、いかにして質を維持しながら自らの研究内容を相手に理解させることができるかを考察せることになった。その点でこのシンポジウムは、研究発信に止まらず自身の研究を相対的に見つめ直す機会として有益であった。

多くの博物館を訪問できたのも成果である。紙幅の都合上割愛したが、各博物館や美術館については、入場料は決して安くなくクローカーも有料である。一方で展示はかなり充実しており、市民を優待するシステムもある。展示の充実化や職員の確保等、運営に少なからぬ費用が必要である事実を深く認識できた。

考古学に関して述べると、日本の研究が海外に発信されることは少なく、近年その状況は改善されつつあるが、未だ門戸は広くない⁵⁾。日本と海外の研究者が同じレベルで研究を行うためにも、今回のような交換シンポジウムは引き続き行われるべきであろう。

今後も大阪市大と UIUCとの交換シンポジウムが開かれ、積極的な「研究発信の場」が絶えぬよう願う次第である。末筆ながら今回このような機会を与えていただいたことにお礼を申し上げたい。

注

1. Blair, Heather, *Real and Imagined: The Peak of Gold in Heian Japan*, Harvard University Asia Center, Harvard, 2015.
2. 前田充洋「ビーレフェルト留学体験記——研究と交流をめぐって——」『都市文化研究』17号, 2015年, 149-151頁。
3. プログラムについては <https://illinois.edu/lb/files/2016/03/04/59171.pdf> を参照。
4. 「日本のこと」を発信する重要性を示すものとして、たとえば小野寺拓也「主体・史料・感情——野戦郵便研究を通じて見えてきたもの——」第14回歴史家協会大会特別講演、同志社大学, 2014年, 望田幸男「戦後歴史学のひとこま——わが学びの節々——」『ゲシヒテ』7号, 2014年, 51-52頁。
5. たとえば、北アメリカにおける考古学研究の現状と日本考古学を比較し、日本考古学における方法論の有効性を指摘する見解が提示されているものとして、佐々木憲一「日本考古学の方法論——アメリカ考古学との比較から——」『考古学研究』59巻3号, 2012年, 23-31頁。